鶉衣 七 續篇

へ 5
2092
3

へ利5
2092
巻C3

宮内省
図書寮

帝室
博物館
図書

帝国
図書館

ゆゑいかなる仏菩薩にもあらぬ
きこえて京洛の里に世俗のれ御信心の
ふるまひ常のすがたにもあらぬ
せられつれ御菩薩にて秘めゆわれ
をしなべて世にあるものの外にあらぬ
父なる文世なるに文なりて御信心
のふるまひをせられゆのれみやちう
壁巾なる世なるに友なりれ
いよいよゆゑいかなるつよもつよくくら
るるれるみのれ稚なる文のせること
ゆるるすがのせるまるして半掃菴を行通ひぬ
なる天明の始にまるれ行のの文
半掃庵ゆの獲紀国に林なるのれ
のこりあわしら月を紀二年を紀まる彼のこと
いとせるちりなる出つるる天明のころ
ちにこしなる中東のめ獲紀国よりる

ゆくえしらずて為のき福部山の花は毎年
ちりて世をいろめつくれども
のこりはてしは多くは藤花園にまりてはは
あくまなくちりせぬ言葉和より文の意をうけて
為の文ものこりなくてくまにつゝ同よ
こういわつあゆきつゝたのれも亦その仮路の
たのりゝなくれいみのわらこまりゝはは
ちくふすれせなむとたのひてこひ申よ
ちりて世をいろめつくれども紅りのあくまり早く部山の
くれのの文も或ハ紅りのあくまり早く部山の
こゝろのひとつにて申ちつゝ亦為の文よ
花言葉は雅緩源古草花義由と世界のち
聖文法永代蔵子徳合法わり詩集ハ
世界隠花倫和歌の集と世界家集和歌の集を行くこゝ
まくゝ俳諧の集しよみ句集五百句集
蕉雄集集幡原集りわ俳諧和聯句集

二条わり古和のまと稿よりてこぶみ乃れ
ゑ〻ん後の〻〻ゆもとてくくみ〻〻
あゆたなむ

文政未の〻〻　をゝりく　さ乃ゑ

宗雅田中啓文書

石井蒙禅

白井秋水

〻〻文章をとゝ集て或日腹ゆ敷〻訓て

いと〻
宮やをてみ〻いひ衣のみきの
うしてゝ〻てゞ見ゝ〻ゝまゝ乃
をゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ衣ゝ〻ゝ〻ゝ
源ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ

日を国あゝ人ゆて世名〻せ

百六歳なる大工甚助なるものあり人の供をして
金八是をことにする金をたのみ[illegible]て此時其元を訪ひ
奉ふの[illegible]ハ又金ゆすむる後をすて常よりへ
[illegible]をされハことこゝふきをのふこゝより武所より百六歳
[illegible]ハ家わりて是をうつりたるを若[illegible]
[illegible]めて[illegible]物をうつハてみ[illegible]人わり是ハ
[illegible]又百姓金長[illegible]をこゝふ人の品よりこれハ
彼の翁を[illegible]てこゝ[illegible]れのこゝ[illegible]
久しくものゝ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]
歌立より百六歳のけ[illegible]
うれハめて[illegible]世の茶めし[illegible]ふ

田子菴記

こゝより田子[illegible]ハ[illegible]れハ此家より[illegible]せる[illegible]貝の[illegible]わ
[illegible]れを田子浦とよ[illegible]
[illegible]浦の名をとりて盃の名[illegible]赤盃の名をとりて菴の名
[illegible]まて物を用ひ[illegible]ん器物衣服の[illegible]
多数の人りて古ひめ[illegible]より用る度より新る田子の名を
めてさ[illegible]れ思ふ[illegible]ハ[illegible]
有つ[illegible]欄よりて散る[illegible]を惜て詩をとゝ[illegible]て月行
よりこゝ[illegible]ぬ所もあ[illegible]ハ此菴の名のそれより[illegible]
周度より名よみふ佳境彷[illegible]
情を添ふ[illegible]て常より雪月花の[illegible]
[illegible]て年立る屋蘇

よりもまづは物とりにふるれハ酔ふ〳〵初芝ふも其
名のえ〳〵われハなを〳〵一富士の嘉世をもとるなや
あ〳〵さあ〳〵一指と戸よりゝ心其物其名の事由を
うゆてあ〳〵しの名もよをせり我才の藻屑なる行とう
其汀よりさきよ〳〵さ品戸よ酒賜の乏〳〵くて八仙の
仲間ふ〳〵を見よ對〳〵ても飽のひひなふ
見の〳〵四子の〳〵ふをうゆ〳〵もをを

繙或人書

吾子八〳〵講武をいて軒号〳〵ふも俳諧ふ用ひて
名〳〵すあ〳〵面白〳〵すや吾子八ゆ〳〵ゆ武門の人や
号壹をの吸簫ふ俗屋と〳〵〳〵油壹あの看板と

油屋〳〵名の〳〵壹〳〵人のまゝふまゝ〳〵めなれハ其
いゝ〳〵れあり吾子〳〵風雅の見有なるゆ武をを一ふ
混せん〳〵ふ私〳〵の逢〳〵いといふ〳〵一潮を携〳〵て詩を
徒〳〵ふ扇を変て新〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふれをそれ見八見
ゆてを〳〵見をいてそれをあゆ〳〵ふをそれをいて
見を害せを文武二乃と称を〳〵八其事海をを
人是を候ふを〳〵ふ〳〵れを名の〳〵ふい甚見〳〵五巻
井〳〵射法の辯す〳〵或人見を評〳〵て曰を文の始ふハ
武士の武士見きハ墨を掩ふと書て人の侍りふ汁
を〳〵武蔵をあてふすく〳〵をといひて他の朔り
蓋を〳〵てさて其事ふ書〳〵一筆見きを〳〵巽士の
〳〵藝の自慢ハ侍若無人や律を知り〳〵侍の

破戒無慚と経学よりうるわしく人の不行儀なるを
わるきことをかりてわるきことをかせ世をいふ三宝の拾物を
して異ごとを療治をかとりて白蔵主も口
を閉扁鵲をとりて袖をかりて只つくせてうるかり
なり新當流も正法念流のうち武士の常なりて
それらこそ出るものはわるを推る武門を生れて是を
うなるものなるべき二流三流の印可免許もはかりえ
弥ゝ〳〵天下の名人はみのつゝ人もあり世を所は
まして名列のさゝや世を馬とうるゝえわれと山上
八そこの名をうるもとゝはこそ八道を分よりて遠き
おる投露うるゝ〳〵昔武人欲を自責てこの欲の
心の奥はよりもとゝ〳〵定家家隆も新邸を達立り後
うるゝ辺達ゝ定家家隆もとゝめるゝ〳〵その中
ゝ〳〵ぬなりうるゝはうるゝ其ゝめ〳〵も思い出る
師匠を下なるゝは弟子は師匠を絶るもわるゝ〳〵と
称のゝを本ゝは遼東の豕やめつゝ〳〵ゝ
そのゝうの衆の思ひ中〳〵れてゝ武和ゝの下の弓
やつゝ〳〵ゝむ佐ゝ木梶原ゝ先陣を保して掠ゝ敵
万の油断人一騎も強ゝきわゝ〳〵れは謙令ゝその
蓋言もかゝ〳〵是ゝて戻りうるゝ金りを不審内
なるゝ得遺ひや二騎ゝうるゝ渡されぬ川なるゝ
何ゝを不覚の先陣ゝて大死をはすゝき後陣のつゝく
川ゝゝれはゝて先登の功は立ゝれ抜武藝十万人
を捨れゝわゝも用るゝ不義なるゝは明智を誅せゝ

士氏の行跡なども多くは志ある功ありて名を残す人なり
ハ仁義五常のそなはりたるものなり碁家棋
も舞謡もみな物ごとの名人やそもや五常の
智能をつくして行をおこなひて其功をなす行をおこなひて其
名を残さむ家を建て後世に栄せんこと
功なり名遂ぐるハ我ら行ひの仕上とぞ孔子も
分退をいひ孟子ハ我ら行ひの仕上とぞ孔子も
学問ハ隠居してこそいろは習ふよりも仁義
五常をこそ問も重言すなり外ハ敵之線り
のせる五常もあるハ先ハ五常のなる
仁義ハ分りて仁義五常といふも及ばぬ新人坊ら
うのを庚申ばかりとみれば我ら

ても能潜ハ志ある静迦の鼻をせりあり輝く金色
の光をさすは孔子の肌を這ふ蚤ハ道徳ハ
物ものを勧学院の雀ハ蒙求を軒ばの
ささやき声を聴ぬやうにあり鄙生を学ぶ
学ぶハ及ばぬをさとれハ其世に生れ合せて碩徳の
直弟子なるも必上ものを極めるなるハ潜勢ハ
杏指の付をとれハ祖翁の血脉をうけて能潜文
章の名人ハ家一人やうにすなるハ又翁の方
なるも一人ハ渡りなるの責上げ潜文のなる
同じハ門なる拙なれば能潜ハ定めて上ものは
てやあるべし武士をハ兵具にして頼ハ門人を
恭不の代よりなるものハ引て楠村上ハ上ものは大言

いふ人も其場に臨み其事にあつまりされハかうハいとは
ゝとゝれすさまを賢もこゝろゆして言をいて人を
拳をゝふのあくり是を我里ゝて伝弁慶ゝハいふや
ゝゝ文選ハ能階の文集とゝきけハ一篇ハ要き
ゝゝもとゝき語もなし素子への異ゝゝハ紀全の
聖ゝゝゝ至のハゝ何ゝハ辨ハあゝやと潜ハ
清ゝゝゝ人もあゝしゝ是臭きゝゝ懐のさう
ゝゝゝ人も其非をいひさゝ物なゝゝされハ武を
講ゝゝも兵を紙ゝも武士ハ勿論ゝゝ治合ゝれハ能
清ハおいてハいゝゝゝさし早ハ世界を改ゝふゝ我も武
門ハ生れゝれハ弟一ハ先ゝ鼻を掩ふゝしゝゝふゝ刎
臭きゝゝんされハゝゝ臭きもの弟ゝゝゝハいゝハ
白ハ章ゝゝゝゝゝを

能席擬

一禅を問ゝハ辞義ゝゝまゝきゝ
一乗更て時を向ゝゝゝゝ事
但彷彿の斛ハ神ゝゝゝゝを
一世間ゝれゝハゝゝゝゝ王衍ゝ麈尾を揮ゝ
ゝゝ浜国の居眠ハ有ゝゝ
右先達ての定ゝれゝを捨て菴の新制ゝて領合
ゝゝゝゝゝ亭主の了簡なれハ客の心得ハ及ゝゝゝ
且ハ言葉ハ似ゝゝんも口ゝゝゝゝゝ茶ハ沸く
ゝゝゝゝ茶のゝゝゝゝ茶ゝゝを守ゝハ茶めゝゝ

麦飯も刑三石の内にもるべし

俗人能席定

一飯はなべ茶事用るべし汁なきハ勿論うてなるべ
茶もるべしハ汁あるべし

一菜ハ一ツにて奥身ハ有り但を珍奇を必求むべ
なるべき時ハ豆腐茄子より精をもるべ言葉ハ
いふものあるべんや

一香の物ハ論するに及ばず

一りハ麩の好あり定規ハ右に准て

一酒ハ盃に大小あれハ上戸にても二献に過べ
酒に肴といふ物ハすまぬ酒をすむる助にてもよ

宴會なるべ
なるべ暗に一菜の
者と名つけて一椀
雪霜の秋風に帰路の寒さを防むに
殘一重て一ツ満尾のよるゆいて一酌をめぐすも又
其時の掟ハよるべ
堅く肯つべを相撲芸居の果ハ必宜敬に帰り申す
能楽の集會の饗会に流るべ世のつべて
其そこの欲なるべやされハ翁のなる茶三石ハ皆人の
口三ツにもるべ其志めを思ふ人女なるべ茶にべ
汁一ツにるべ者教なれハよりて菜数を去むや
さるべの鱠の志の平のなるべ茶の膳になるべむを

〻〻ハ行聊の俳の頭陀をすて〻芹馬芹杖とつれ
〻〻〻〻本為本情よわ〻〻〻をもく〻海内を
をのこ世〻と忍れてこそ俳席の掟を清ふそる
信わ〻志を貴〻て餞具の定をもつて得るものや

仍鄙文

動静壽夭の偏ゆなりて仍の壽ハ世〻を斗そいつり
石の性ハ硬〻〻てり事墨の新よハ〻〻そ
者〻もいつへ〻れ〻只事〻〻分の幸よるもつを
〻〻ハ猶ろ〻なりてハ猶よもまれて〻ら保れ
其齢ハ月をもてう〻ふへ〻わ〻ハまま撰庵〻用
られてハゆ〻〻〻〻〻撰とられ目〻りの新仁り

敬られてハ是も齢ハ〻〻年を斗へめく〻こ〻れ〻〻ハ皆
下〻〻の姥嫁よ仕〻られて夫仏膳もとの勅よわ〻〻そ
〻れハ〻の仍ハ昭近のつ〻めよりてさてや世ゆ〻そ
計あつ〻己り壽とも事るなくきをやこるゆ田集
致仕大夫境徴君の近侍〻て多年の奉公仏ま
〻に寵遇のおより一面の仍を傷ゆ書よ作〻て
是を秘蔵をニアよ仍の詞を求むるよ代めの勅る
〻〻〻仍のつ〻めよ似〻〻むよハ〻〻も彗代の
春水〻つく〻奉〻〻きを行事ゆ於〻〻〻〻光ほ〻〻せそ
〻〻ゆ〻〻りぬ

仍某求作序

其人のうめる世人のしる集編るといふや雲の峯の
ゆうりわるましわるそ只風月の席に交るそ幸わり
さるも其齢をうかゝふるに八十字白川もわるりを
見くハこゆるきのいそもいまそ至ねハいさ月をむいに
雪をひさうふもいさるふもみのつゝ物好のさふ
ふしもあるさむやうれハ世るめを祝めるき月をも添め
見ハ彼の屋に惜き雪をもをたてさてや莫逆のおしと
なるむハ祀稟犁来り交まも厚ハ揚る方をわむそもや
彼の老ハ風雅に拙いあるとをそ一緇素の友に信ありて方に
さのそ思つる人多れハけ別を惜ひ涙墓柘もそのそる
そうりになむさるそ思へハそれわるも只口にいひそそいるめ今
世時に世集を編て其人の跡をを稽ひ人に止りること
[illegible]

[illegible]向の山の郭公雲のそあるそ世信いそ其跡に面ひそうへき

傍晩亭記　並野呂氏需

ちるに新小さ居いそ竿一ハ更に久しうねしさ又限なき
き形陽そやうしたそ事思ひやりしそさまそわてもそも
のの行ひ詩やめて只叫そうのやうしもすきハうるあるの
ふつくせるそあんあるしハ行年そうしも七年ハ世落に幸なら
ひるに半日の閑をそる時に憲にる嶺の月を招き池に巔川の
なんに代りて宮服塵衢の耳を洗ハ世そるる水をの別てた
にあるさうハの酔のためなりても人のふとそ雪ちんさしを
昔蜀山元そしては房州仲男を呼んで傍晩をんぬ百尺
の楼閣八要の産業是仁ふの二ッやそ有るれハ天下に猛威をふ

ゑんとて世こうの中の數たくさん是こ鮮池こ閑寂とたのしめ
こ老のりへと参ふのこるあ〜可成まつ岩こ苔を愛こうの
き繭のおもしいをなること長く子孫どもの侍こそ和色久ぬ
幽居なるへしなる〜皮の門敲きくる日あるも一ぱの見こ求
いはまこハ宗勝寺の額書てはあるこ人も有〜家既こ老こ
むくのすゝをもりふ人なるこハこそこ東籬のもの酔こ楽
しこついこ世間一番こ〜心中こ勝家こ〜時こ〜すてあ
るれ自分こ〜まこ〜こ〜こ人こ〜ありぬへし

蒙こ〜ゝてみる山のこ〜西こあり

一德辨

鞠とすゝめ人ハ九枝あり〜こ〜ゝぬ人ハ二德あり〜こ〜ゝ後
あ〜ゆる枝葉こ九枝ハ〜こ〜ゝ後へ〜こ〜ゝ一ハ十枝こ〜ゝ
きハこ〜いこ〜ゝ不用のものも〜こ〜ゝ〜こ〜ゝ
なつ〜ゝ世ふよ人のこ〜ゝあこ〜ゝ家業の外天こ〜ゝ
身こ〜ゝ後こ〜ゝ業こ〜ゝ何こ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ
物こ〜ゝ陰合のこ〜ゝこ〜ゝ〜ゝ國こ〜ゝ民こ〜ゝ
へこ〜ゝ常こ〜ゝ人こ〜ゝ陰人合こ〜ゝ
除中納言の大食こ〜ゝ酒ゆ〜ゝ〜ゝ料
理人のこ〜ゝ〜ゝ二便ハ〜ゝ〜ゝ〜ゝ
にこ〜ゝ業縁の事こ〜ゝ〜ゝ〜ゝ
ハこ〜ゝ楽こ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ
の茶人こ〜ゝ南京こ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

遠ひありて陸合とし各別のけて三樽と又大小の二ツ
中より大小人の手はに長雪隠の時とつすも終に昼夜よ
つもなしるるすに小便のとつはきさのを隙ハそねとも
きうよ是へと信すはしいそるるに信ふ小樂車よたまりも
武者の戦場よ来るる切すもも業物とたゝみ上てもそ歌よ
ほうとうすくしまして淡路屋の中よこ袋の切ふる
けん鮮集の勝をはしふおて仕ものの要又と必りしたすの
仕ての仕伝とん銭才ゆるハ下るえよ仕とたつ才除物長舟
よりと尾ちる家ちすも先ふるよ悩さる手世よ手ーされ
とる方小切の才の上のこあるきそうしもり故ーはは水とほう
書もも法をつくて人見と而ぬと偽するたすかくうえなき
ゆすれもはるる徒とはふ小茶のこ

影のもはとるてと貴湯川の食ようる組ハ是ようけて危き老
爰とうつ久越王ハうしをめてを格の形とすくく今も世
上の途中ていやる人よりあるはけたらやるき家も
ちく近る方ちきる老のるのとこうて消たきはけるく件の
用ととくのふ張すて予て溝汚よほをいるて内宜しおよ寄
ありるーなるたさとなてて言いて難とのるれしくれ小便
も他ありしふ下ー幼子の居いれハ乳母の油汚と此化
てもこの科ちすすさると老人のれるうハふまもつて
くはすうとまして老てやうくハ見くくと首の見ちの大
きはきこのーさてても光の才の苦ーき表浅ら根もすう
原夢のお將の九十九歳と二夜の仏ーて人ら人とおきとい
ひくん師をの月とありぬ数よ泳めとれくうよ小宝さハ法衣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夫も昔も漏さるゝハ抜ら俗塵の大海ゆゑとやかゝる自ら思ひ行てゝ
なゝくさむいさゝゑぬ雨のまゝさしわびくれ初る氏の河をゝゝ月今の始
なゝくゝ

機集小序

家庵に住せし昔ゝ庵のめしに名るわが老麦の花咲ころ水ゝ
の松ゝとて仮初の別れ一決ゝとしの春を惜わけ単蔵の尼
手拭を汗とゝ入くゝて行先ゝのゝ故郷のうち深
よゝかしに立て牧ゝこゝ新の一句をとゝ一機のあるゝ上一雄
の塚と繋き旅客のゝ小便とそれも越路の雪をゝ眞紙
乃の法もてめりて面ゝこの句を拾い今ハ武蔵ゝ鍬を休め
しゝゝ白隅田の春一人ゝ住自悠ゝとて閑めゝ便ゝ小半を
昔ゝ抜実や釈氏の流ゝ書ゝ賢ゝ仏堂の徒行空ゝ

ゝとゝゝ夫ハ一時のまさらゝとゝゝゝゝて永き世ゝ
跡をゝ世ゝ沮翁の追後ゝのゝとゝ是ゝまけるべきゝゝゝも
ゝゝ駝ゝ満ゝゝまつ示ゝの拝立とゝゝゝて編集一部の
口とゝゝゝゝ余ゝゝ小序のゝゝとゝ路士の輻湊す
ゝ不隣ゝゝ途ゝ需ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
遠ゝ光物ゝゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝゝゝ旅客の情のゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ家ゝの青育ゝ入ゝゝ

俳歌并序

ゝゝ芳梳歌

ゝゝ芳委遁ハ一ゝゝ天台の教ゝ入豆腐亮翁の法伝ゝ

しかいうまゝ人ちかしいふうらのこゝろ伝へて後ハ浮世のこと
そこゝろ人の或ハ和歌と学び茶と樂と禅と俳諧と折ふしの客
とゝ生れのうのうてこゝろ身の幸もつりてはあ流家の
蓬せらく一庵を結びてすまゝ有りしハ今ひとえ
をしうせ事ハ人のはきちを拝伝法へり給ふ夫より
越と波の夷ねの隈くまてもんじとして菴ハあちらの人と共
けをて杖笠をうれ初りらいのこゝろ巡てひの武蔵と情
わる富ろ悲し皆庵のあるこゝもちぬるきこんろハぬさ
と信濃やわるの旅わと夜とうねしかとそこの人くと
うこゝして名と中ふ戦のりこゝ一基の塚といとたを義の名を
乗してゆきこの好士の行方ゝ知ぬとそ伝夫
まものり先くとけ名とひとひすあてゝ一物とたすけ侍る

世こん機塚の撰集して世と行くしの志ありとてるこ一夏の
比予とふ庵の求もせこりもこ事をうこしてゝ病よりこりけ
月の世日あまり幸と夜其ものの容こしたりぬるなりしこと
しいへしこ事くとなき数とうとこ老のつとをるまこりと齢又
りしこ同こりなしなるこ行こりこ行事のこハこうこ家ハ
こ帰こ世こりこなるこ行宮方の志あらいさまこさこきるこ
てもこくこまて人の後弱ハなこ人こりのこ是や世の定じまこき
さこめなんこ思ひこりこいけ世こ家分の露こく残りて
こ人のあこ和めこ世や老又定じまこき世のさこめこあり
こり鶯哭の悦歌と裁して曰
木方路こ候の旅とて分こり武義師と長きこんとこ成ぬる留。
ぬへこそこふ松の風　消てもこり火の滴。

まとしめや　春は霞　月雪の夜
みどりすら　葉は紅　もみぢの秋
巻ハ嵐の巣にあれて　蝙蝠舞て怪
垣ハ犬のあけて　蟋蟀鳴て愁
昔の文ちら残　老の涙川流
よしなき鶴の雲にうそ　怪くは彼もえんや不

惇楚中子文

お月様の写る清泉あり侍のとのこのかへりて返事ハ後
れ行人にたち並てもるるを数とし〳〵々〳〵尋常の世事と同流り
てさしいらしえさせたる双帝の御ちりうて求き見をまきしぬ
作是う来しの巻れ人てうてよなとも半なるぬるうしのすさ
ひも例のまもめるうるるやうるるんたるるる

あるべき様とすべてむかしもつゝしみて世をうとましく思ふ人のまねびてきき業をつゝむせるさゝくさん家にも忘年の交をゝりかくれ是よりかなのゝ心ゝしあるまゝうとましく思ふ悔あるべきやハ百へきしい恨なき齢ともいへ別ハこゝめきさるゝ

手偈の棒ともしなとくき次

方笠庵 記 五位 石原氏需

方笠庵のぬし方笠居士とかなて方笠庵の池をもつけたる也庵ハ名をもあるいふ人しるしたる世を例の西園寺公彼ハて交ゝ十年の庵をたゝるも漂ゝる物茶をもゝ呼ふへも世帯におたゝまれ才耳閑八口垂の花るゝあそ

ゝ世吟況ハ小里の雪水ゝかゝるあるて是と一ゝの笠と物人ゝ
ゝや方の一字ハ笠のかさちゝしめ形をきゝてゝ小方文ゝ一さるゝ
除多の物仲もゝゝ結ゝ結ゝ結根人ゝ切の関ちもゝとゝめ才あゝハ
吉仲の保ゝ世ゝとゝうゝれゝ市人ゝ是ゝゝんゝちるゝ和を
貴人ゝ居ちゝゝ交の俳ゝゝるゝんゝれゝ立の俗客ゝ庵の
ありゝゝゝゝて是ゝ笠ちる事ゝ一ゝ毛ゝ笠ちるゝと
はゝゝてゝれゝ菴ちる事をゝゝいさや家ゝゝんの同形
ちゝゝゝゝゝれゝ泥ゝ古ゝ也ゝ接ゝゝゝゝ和の法似せんと
ゝ笠の形ゝ玄外ゝ

代賛

器ハ入ゝ物仰ゝて已ゝ方円ゝ後ゝ已ゝ代ゝハ入ゝゝある

住て已る方円を必とせて要する時ハ眉を余り虚空
時〻〻〻て儕を隔る虚空の自在なる布の一結
壺中の天地を笑ふべし〻〻

月瓶の説や形を定よ〻〻

瓶墓記

井戸車の古い〻を以て瓶の墓〻なせるわり是ハ
わる官邸の天井の〻〻へよくくくて墓〻つもれわり
瓶を出て面白き容なりて其斤面を漆して
風流なる物ふなわりされハや凛らむ〻とする
至つて危き有るを若あの晨より大海の風呂の
夕へまて一日も休まる〻われ其古い〻さあるを

それも暫のかりとよハ〻〻〻〻新〻つせ〻〻〻〻ひのふり
つ〻〻〻〻り檜垣の姫こ〻ろとくむまてもて呆〻〻〻む
さてや其危ひを絶つ〻〻いそ〻〻を仕昂して今の
月の安く静る〻を汚瓶の露〻〻も昔を似る〻を
なる〻さもいそ〻〻〻〻り〻〻〻ふわ〻〻の立仙六仙を
まな〻〻れ仮〻〻の玉や作らるのこいれつ〻〻ん
物換り星〻つりて玉も六助も今行くるわる思ひ
ひとりけ物の月を全〻して今ハ要まやり瓶
沈屑て大賓客の〻あるも硝も床を下〻〻の
かく〻まき行まな〻むく〻ハ昔の業刀今の剣も
いかへ〻〻むり〻安く静まりてこそ千世の壽もわぬ
面〻〻〻又拂清の欠くて大の仮器より〻れ磨の

引わかれて諸国にくだるとも何の面目か
あるべき只世間の富貴にあらざれ人もみな性の性
世につれてよわつるみるい名誉おのもの分をわき
いそしむ勤もなくすす其源をつくる神
すましてこそ安静の境に至るべき儒者わかものの
なるとやそれも只いとよく用る人よわひ幸そ
かしめと世ぬしのつくるてゝ者見の是を始めて
久しく度右まてあるいは新奇ト世
論して揚りとく蔵するとむくなるなり
一語の記を求るまく思ひ返を慢よ為て待とよ家ぬ

宇都宮氏 續編中

續交印賞 住柳町

所の名ふるく遍昭ゆかりせのくを思ひよりてくの
こゝ書て待り時も人春の半なれハ東坡亭よ名
つけ給ふ蘇よも似べき心ゆ和けいを一ちよいく
さく印や交てゝきの柳町

續後朗詠集跋

むかふの町よさゞの思ひぬ医師わりこ年よこ度名
をうふるよりの為の地すを書を情て他の星へるの
恰もてゝ中ぬハりとの名中ぬや 東話亭り

二度の撰集あり頌号ハ同一朗詠なりうの医
師をつとめて是をあつめぬよく世の人のもてなやみ
なやまんしを

為或人書序

五十にして親を慕ふハ世よりまれなるこゝろ也昔
大賢ものがれし七十にして慕ふ人今多陽乃
箕山翁ハ此秋先考の五十回の忌日佛事の
いとなみハさるや其生前ハすなはちそ方の
能士よりの向のうをとりむさぼれハ心の水の濁らぬより
うけうめ人まてもよせみくりやなきさるまて
さるこゝろあるこゝろ白ものあり

こゝろ深き人を動てをいつくりよりあるこゝろ也この
先人烈志子ハ負享元禄の比よりて其角嵐雪曹
友にして深く風雅を好をつりにて其世の流行ハ古集ま
つたくつり其子うまこまてもあり凡月の才を富るこゝろ
はせ世よ多くむや昔曹子ら羊孝を含ゆくハ父の情
をわすれさるれハや今此箕山子の俳諧を称るも又
父の情をを慕ハやこれハ孝よりして捨是ハ孝より
してすてを捨ると捨めと表裏なくして追慕孝情の重さ
を世行くに只詩うねとつり清ようて拠所のさまよ及ぶ
ものうの拠所行をふのまむ孝子の追福よく冥国にて
免しをと

新古菴記

教ちゝわりて其用居よ名わゝむてゝを予よ請ふ請くハ辞
し辞ゝれハ請ふ請ゝを辞ゝゝと御ゝうゝつゝよ辞し
まゝて止ゝをゝをゝされハ予ら辞ゝゝハ茶道よ涙ゝれハや
ちゝゝれゝもゝゝ是を思ふよけゝゝハゝも古式わりて
一事一業ゝ矩をけゝつゝしゝゝゝゝ放恃の詩わゝり
茶杓のわつゝひふゝゝゝゝもゝゝすゝてひゝての舞曲
なゝぶねハゝして上ふめゝゝめゝわゝれしゝゝれハ古ゝ二の舞
して行の面白ゝゝゝわゝむゝゝれを面白ゝハ其故わゝり
同しゝのゝゝゝゝれゝゝゝのふの古ゝゝゝふすれハゝゝ
ゝふの新ゝハゝゝの古ゝゝゝゝてゝゝを見ゝ古ゝゝを賞
すれゝゝ用ゝふハゝゝふゝ新しゝ物の古くゝゝゝゝ

天地自然のゝにしゝ古ゝ物のゝゝゝゝ

堪下よ富家ゝれゝとゝゝふよハ指一本のあゝ
なゝわゝゝゝ利欲よ心のゝゝゝゝゝより畢竟ハ無分別の
三字よ家居も蔵も盧生ゝ夢となゝて時ゝ種の
業の報と成ハ身を悩ゝの袖ゝゝゝれわりさて
人ハ寝ゝゝ宮やゝゝゝいつゝゝゝさゝゝゝの祖翁の
ゝゝ行菴も人の行捨ゝゝ誘なゝわゝゝて其推の木の
陰を慕ゝハ此のつゝゝ仰ゝゝゝわゝゝゝよ一庵の主
ゝハゝゝわゝゝゝすゝゝゝ主ハ茶ゝ好ふ人なゝわゝゝゝ
ゝよ意も恒心もよゝわゝゝゝゝゝゝゝゝれハ境ゝよりて
心ハ轉ゝゝゝゝ移わゝゝのゝゝめゝゝいゝゝ昔の教言ゝ古人
の能習其風流ハ通ひもすゝんゝハ此のつゝゝゝめや
わゝゝゝきゝもや茶ゝゝたすゝての調度も古ゝ物ゝゝ

ゝゝゝゝ中ゝゝ長月比の水仙ゝゝゝ雪間ゝ姫菜と
さゝゝ三月の筍ゝ孝行のゝゝゝよハゝゝゝゝゝゝゝの
初物と爭ハ二月の梅秋の茄子ハ捨ゝゝ早ゝゝ
ゝゝゝゝゝ風雅の上よ思ハ年の内の梅のゝゝゝ
ゝゝ時の貴ゝゝれ其余ハ何ゝ人の物と問ゝゝ
只のゝゝ雪残ゝ行蛍ゝ菊ゝ名残と慕ひゝゝれ
物を四季よ愛ゝゝ行ハゝゝめゝゝ易ハ此の
時ゝよ但すゝゝゝ陶行的の足よ心の報ハかゝ
ゝれ一見ハ茶人を待ゝよハゝゝゝ其ゝゝのゝ
ゝゝゝゝゝ風雅の本ゝゝゝゝゝゝゝ

所の貴を投ずハ金玉有錦来京より見て宋人の燕石
もあるを見るの絢を尚ふといふるゝこゝ教うて
叶ふあらされハ其玉も價をもめてうんとよハわる
思られ父を慕ふ孝子のなみたもあるもやや
よもの春よあハさわ〳〵くも書ふの末まもなを
ゝてハさゝとゝ所ハ思ひもめくへ〳〵け集よ序
を清れて生ふの至孝同ふ〳〵ていちもゝ人其
誠を感ゝせ〳〵むや我ら辞やゝて茗をゝ〳〵け
てみうゝわれハや

九日寧波先生辞

我を生むものハ父母やもを慕ふ先生なり
僕ら今年の秋い〳〵病ふやけ六十ゝを数ふ世のごとり
なゝわれゝゝつゝも思ひ人も左思ふるやさ〳〵向ひ
ていいゝゝれゝもつゝ〳〵ふいちゝ〳〵さゝを先生
の良剤ロをうゝ〳〵再九死の地を出て世ハ〳〵草木
黄〳〵落虫の音よりり行ゝ我ハ引ゝて公地
さのり〳〵菊弦ふゝふハ病ふ歪をゝくるふれハ
ゝゝ〳〵ゝものゝ〳〵け箱を捨ひるものゝゝく
多いの〳〵ゝふいゝ〳〵わゝゝゝゝれゝ例の
一癖ハ止すつゝうふ和ゝてゝかの欲を先生ふ等
ゝ〳〵ゝ

菊のはやまつ沖立の東に離まて

三十撓三ウ

只年〳〵の上をゆのふまもあるハなるさ亜きハ数をふ〳〵歌くハ
老の常うゝを今〳〵年いうゝ春うれハうゝまて古き
友を生ふゝむ睦月も若菜つむ比有為子世をうゝめ
十くゝいよゝゝてなるさ身や初齊
と袖の涙もうゝめよ其サロ今の百枳身まうゝめ
うれハゆゆ〳〵世を捨人ゝる行菴も侘ひうゝ行うゝ
なれハ明ゝるゝゝひ〳〵を立登る世〳〵常の煙もゝる
うゝよたうひ〳〵ハ行思い出るふ〳〵も多〳〵
摘菜や〳〵友を其聖の煙〳〵ハ
見〳〵ゝよさ〳〵つゝふ遊うゝを
ゝまてゝ世ゝゝ侍仲今年ハいうゝ春うれハうゝまて

古き友を生ふゝむ
なゝ行ゝよ指をゝる蕨ゝる寒〳〵

示行菴法

ゝゝよゝ行ゝゝ法師の妻もち奥信てゝ行ゝゝふゝれと
只世を道れ風雅よ行ふゝの砂表撰ゝ似〳〵ふゝむ〳〵著
よゝゝ世てゝく書行わゝやよ今ハ世ゝ〳〵ぬ身をゝゝ
てゝふ人もいゝゝゝゝ

示先以辞

横須賀の先以ハ捕を結をゝて業〳〵を行〳〵舊門の
風雅よ驚ゝゝ世渡りの侍ゝゝも白上の月を

よりて和多の浦沿うくもの戸を閉ふ時ふれよ志めす
風雅をもて家業を妨くるを家業をもて風雅を
妨ゝへしせぬも其日の俳諧よりして陸も其夜の俳
諧なりけるを五論よりいつわりてゆゝしうさ
めりし俗うる契をとゝろとこゝを多好まむといふめと
高く論をれハ意すゝうのまゝまして俳諧よりおいて
をや月更て八十市の里の衰まも通ふんゝ丁東
舎と書て与へぬ只其家の家よりをいゝまも
浪の音さへ添て長く風雅の家かもわれゝや

如是菴撰詞

うりてめの落て立列わるゝ遠さあふゝの
土とゝなりし南空坊ゝ魂よ告むゝ祖翁ハ浪華の露
と消ゝ尚雪ハ鎌倉の月よ分を絶ふ雲り俳諧
行脚の調すゝ而ゝのゝ志れハ如是菴行ゝゝ
ゝむ行を敬ゝへきさハいく齢ハ一ゝの花まて文ゝ
我ゝ年月も久ゝ僧子衰れなるゝを世度ハ不ゝ菴よ
ゆゝれ今亦ハ漢を嗜(イヽム)老の分のいつれゝくの上まを
ゝ国なゝむ

ゆゝもなゝ翁寿の雪信

子有功子書

ゝて其悪きを知りゝて其よきを志れゝ人を
言を捨ゝゝも国ゝ和よ軽ゝ者ゝ夜ゝめハ

島の雲も月は海に入ようと世は世々の眼にそゝるゝ
なれそもや永禄の時君を去ること一度にして
肝膽をくだき君は山陽の和藻の才は高て詩を
府下に吟じ且俳諧に於ては貴族の情を動し敏
口を開く玉を吐き筆をとれば錦を織る新の詩の
筆は天地を動す秋の云て君は此の月の容
をてらす燈は今あるしても何ぞ我が俳諧の好
悪をてらさん君をまつの詩とせむは五十余年の非
をもとゝくしく今や老後の力を得たりつゝ君が
俳諧をつくるより露川が著は出るといへ
其藍の藍なるを知て其色を慕ふ人々

濃き淡きは何人か出せる物やこのころひとゝなる論ゝ本
文操十論の上はいと誠に我多年瞑想する所
治埃もなく不思議や去て我況り君が響を
ゝ一度は驚き一度は憤ゝる論ゝ抑
東西坊は舊門の逸物や昔葛の公原より續
五論を著て姿情の實治合の論實は俳諧の
省體を別ち其後東西坊語夏長ゝは云物
金言妙語ゝ世を惜ゝ終正字の紀
を書て支考の名をたゝるものは擬して自注をなす
外を蓮二は謂せて文盜を選して自注をなす
文操を編て真名の新割は及ぶ十論を著て
虚實を論し名は俳諧の二字を仮れ長ゆ

李卿の耳よりして酒を中して併書を徒死苦の
贄ハ俳諧のさまよ及ぶ敷誉ハ有る人の つよわる
の君らいふ所確論よりして孫さん今ゝ見よ行を
かくむ志ゝ先よいふゝ我君を待ゝせむよハ我又
清き光ゝ只僚友の係きを恥を願君分
ゝさむゝて其いふ所他よわゝ君蓮二を待ゝを
きけゝいまゝ支考を称ゝをゝす儒士ハ教氏
を仿ゝ其法のゝゝさわれハ潛よゝわて
身の上の益ゝ俳徒ハ儒をいやめゝ其をの
理よけゝハ駅用りてゝ今日の法ゝ内法皆ゝの
ゝ浪や支考ハ蕉門の後良や旧法ゝよわ
紙矩をゝしの文操十論の法よ和いても移
俳諧ゝゝ物女ゝ君俳諧の益をゝむゝ必
見を法ゝをなられゝ我ハ君ゝ和をすゝわゝ君ゝ
悔てゝを忘れむハ其損只若よわ君ゝ和として
悪きを知ゝハ其損秋よわゝくゝ待ゝむゝ
ゝゝむ弱ゝ所ゝよわゝ何ゝ今書をゝす志を
いふ多言ゝゝ但家君よゝすゝわゝ
君ゝゝ我をいゝゝゝ川時やゝ酒日ゝよ厚ゝ訪れむをいつれのゝを又
一飲よ相笑ひて之秋の岡を解むのゝ多罪ゝゝ

桜の日の序

蕉公初生之日の七部集ゝを世よわゝむゝゝ中よ久ゝの日の集ハ

尾張五分伝もいふ五月雨暮雨苔の門人驥六
なる者の家より一生の二分伝わりこれを
往昔仲を軒のわるしの翁を招きて其日なるものを
して其事の井竹竹弟しまよ遠せやいつれの
集より出るもつとえすされハ暮雨苔曉甚子是を
をしと是を尊して社中をしひて四生の分伝
つゝね再尾張五歌伝を結むゝ稿ちわて同をを
誰ハ行の尾をりて貂を結ゝりとゝあゝき祖翁の
魂りとりをゝゝゝも考眼をして賞ゝうゝむ今人
なゝゝいふへゝゝ実より本州の面起をもいふへゝし
浄写を臨て予より一語をゝゝ結ゝゝ嗟乎是まを
舊門の盛事や何と口を塞んやと年八明和の五めゝり
龍海方ゝ集ゝ法もあのゝ亜ゝ久ゝの日の短き者をゝ
ゝゝて所責をふさゝてゝゝゝ

郭公文墓記

郭公の文墓ハ名より二月浮の浪より立並ゝむゝゝは
わゝす昔持ゝ文墓ハ世を遠れゝゝ人ハ世を
りゝゝ客をゝゝゝて天ふゝ茶ゝゝき勇もわゝ人ハ
不用の物ハうゝさゝまゝすゝふめ一ゝゝゝ人ハおゝわて
ゝゝゝ程も二十年より近ゝ通日英ゝ知ゝをのゝ所い
ゝて物語ゝゝ席より世菴より物ゝうゝきハ寸ゝ知ゝゝき
ハ地をすゝゝゝゝりの物一ゝ行の和せゝゝゝわゝむ
ゝゝゝゝハ得ゝゝ者ゝわれハ翁のゝめより造ゝせんと

[illegible]て[illegible]むかしより思へハ必憐れみを垂のこゝろわすれ給
わすれしよりつよくこゝろわすれ給ハ長明ら車ら
つくりて建つ山[illegible]つくりて[illegible]方丈よりこゝろも折
[illegible]を作りこゝろめしを思ふよわ〳〵ハさて
わりなくむさくるまても今世ハ此の行ゝ[illegible]や凡
[illegible]なき世内者ら兵ら往まて家ハ一所の二ゝ[illegible]
稀ゝ[illegible]さくゝ書書ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]者のよ
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ夢ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ立ゝ[illegible]いと
むつゝ只西もゝゝゝ

むとてふしめむとするまゝ刻限方よ梅の句を清集て水く
宝永よりめむしを其志ろるよ及て予よ小序の需あり
我き後京極摂政殿のしるむ清うる梅のゝ心を
しるてよりのと春のゝとなるゝ見をゆゝ万世の
後も新こゝむ人の梅すめのめしを慕ふとゝ
よハ其人をもゝてこゝよハ其人いらもゝされハ不朽の
名をゝるといふ〳〵我ら短才ゝ他のいつくきゝ
〳〵只中一句を挙て新年の労の梅のゝ待て
むるゝゝゝゝかゝゝ見ゝも小序といゝいつくし
今梅〳〵梅や世〳〵の春のこゝ

八橋集序

ゝゝきめゝわゝの年月よわゝすきめふハゝふのむゝ男
わゝゝゝ参行よ序草ゝゝゝわて風雅よ聚るわまり
け国よ迹ゝゝ名よゝゝて八橋集選んと思いゝゝゝ
さのむゝゝさのゝゝなゝ水行川の泡ゝ消てゝけ
ゝてゝゝわ〳〵〳〵〳〵の捨ゝゝゝゝて二三の門人きゝ
つゝゝゝてゝゝ一部の功なりぬゝれハ名ゝゝわて容ゝ
ゝゝを必〳〵〳〵協よゝけ〳〵海よゝゝゝて只四季の
書をゝ〳〵〳〵て見を八ゝゝゝゝせゝや元且選ゝの洒落
なゝ〳〵〳〵赤ハ其澤よゝゝゝ行の法のゆゝゝゝまゝゝゝ
わゝ〳〵世よ知いゝゝ〳〵け集のゝゝまゝをゝゝゝゝ
ものせ〳〵言の葉のつまゝゝわれハ小序を清ゝゝ老の
まゝゝなゝこゝ行のゝゝゝゝわゝむゝ辞ゝゝゝも辞〳〵得を

すゝろに物書て徒らに行謝していふもわり駟馬の車に
のゝすハゝ書ものゝ事をめゝ[illegible]人の志わさまに
似たりの順れといふもの行をてはゝゝゝゝゝふて
ゝわてゝくわゝゝゝ八橋まゝゝゝなゝあゝきつゝ秋
只れゝゝゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ苦しと人の情まハ橋守の
心よりせてゝつりゝゝゝむもよしや安ゝくゝ

拾扇話

人のゝより得ゝを得ゝゝいひ交易して得ゝを給ゝゝゝ
めゝくハ謝ゝゝゝの礼わり買へハ價ゝ高下の論わり二ゝの
せゝゝをゝゝれわて拾ふゝゝふ幸わり伊吉の濱の小貝も
秋の山路の落栗もひろふハ拾ふ物ゝゝゝゝれハ

へき所よりわれハ幸のさゝゝよ及ゝゝ異ひゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

思ふへうなる沢山なる拾ひあつめて其西八重
竹草茅もわるを鯉の龍門よ登れる西ゝなれハ
世人のつるよ新宮のうしわるありて天よも仰ぎ
祈る中よ世ふ〻龍門の吉兆分得ゝとさのりて
物ゝて欲ふを大ゝるゝむへりや其知樂舎乃
早めゝふ其行るあゝりのまゝ木川の鯉よりて名つる
ゝ謂われハるゝ〻さゝや怪ゝをゝても恆まされハ
其わゆゝ彼ゝとよろこひをゝてよろこゝ其恆
ゝゝ宣しゝ〻ハ雪解て梅咲折られハ新てゝいひ行る
鯉ハさゝられ食る餓さくのゝ寿の雲

歌八卦

五十ゆゝ六十ゆゝ七まの歌よ八卦ゝ名のわゝゝゝうきゝ年の
ゝられされハ尼年もいつるわゝゝや右卦よゝるゆゝむゝ
ゆゝ泥田よ棒の土性ゝ際四ゝ出る火性ゝ金性ゝゝハ
わゝゝゝゝゝて八年のかゝゝ行ゝれを名生ゝは
あるまゝきをなりいさや年を定めむゝ連中いい
合ゝて目利薄をゝゝゝしさすり佛のこゝゝを生を
すゝて各入れをするよ其さゝ四年の古ひゆゝ所せん
ゝ名をゆめゝゝ年を生れ年ゝ六十一卦の卦の
ゝゝりゝゝつのゝの丑ゝりゝ見ようゝてゆゝ志ゆゝと
皆わゝめゝハこのゝゝ年志の宮中よ見れゝ年を
定ゝゝも定めゝゝ世の中ゆゝ紀命ゝてゝいるゝ人の
人ゝゝハゝゝゝゝれぬ生れ年ゝふ定まゝゝ又時ゝ蓍

三彩集序

信濃なる浅間山は名にしあふ富士の煙にして四時の雪
をいただき名所多き吉野にも卯月の花のあけぼの
吹たつる淀の川霧の郭公も声ごとに須磨
更科の月にいづる山ぶしの鹿はよのつねの雲
なかめにたなびく雲はなほ雪を思ひ出て
雪の名所もいづくにかはあらん人の目にふれ
漁間の煙ゆゑ立ぬれば所を惜て此国の
好事の三士集作りて世に挑むと集成りぬ
歌号を三彩といふ人皆集に三鳥の付
わりてこれは安うぬみなるよう八人又こゝに三彩の
侍りそも此撰者三人の各羽の字を以名付
いまゝ其羽はいつれの名にも定まりぬ
なほ世にいでゝ今定めむと
季をわるものはむつわるはゆゑよりゆゑの作なり
不自由なりさはなるぬ常作の物ぶるふる雅の
羽は仙人にて高尚にて寂にまして哀乃
むつなる鶯は山ぶるゆゑ鳴は不情なる雀
いそゝ只月にうれて秋もすゝいも霞を雪の雪
さまも朝起なる鶏の羽をゆゑ御詩よ作なるあり
なれ絵よ此羽は此をゆゑ定りぬさてこそ梅玉の
ひらさして此集も世に八かゝやくなむ是世にこそ
待よして抜ゝ幸にまゝを得ぬ今の学をも乃
三名は八われのゝ志りてをゆゑ作ゆゑくよまくめら

[illegible]れハ此序を是ゆゑとして撰ぶのもとめる
[illegible]

笠の次の序

東相の[illegible]師ハ[illegible]
[illegible]て只其心のゆ[illegible]
[illegible]の[illegible]海を隔れハ[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

なりて[illegible]
立[illegible]
夢[illegible]
[illegible]
されハ[illegible]
或ハ其地[illegible]
梓行の志あり予[illegible]
[illegible]
[illegible]
金[illegible]の序文ハ得[illegible]
[illegible]邑の老[illegible]
[illegible]の鞍馬[illegible]

不才のわれらを以て辞せむ[illegible]彼の思い合す
夢わり天已に見分定め物已に為りて遊るまし行を
論[illegible]只世物[illegible]を述て其中あり作ふ
よまし其輝のうち新笠の次ぬを以て驥尾につき
千里に涯を遺さむ八李漢韓文に序[illegible]て世に
[illegible]めしも似[illegible]と厚彰に筆[illegible]て
翰を[illegible]て志[illegible]

法樂俳諧序

閑談むし[illegible]百韻の人丸の画像を
[illegible]て殊[illegible]今も世に[illegible]
老流の家に求得[illegible]

[illegible]通日黒田氏釜月子のもとの一韻[illegible]
求出[illegible]黒田氏言て城南[illegible]の里に別荘
あり世地に名[illegible]富士の高根[illegible]
[illegible]つ[illegible]めハかゝて富士[illegible]
釜月子の歳父[illegible]延の[illegible]韓使の朝に
[illegible]時異客の[illegible]
字[illegible]めて別世別荘の号[illegible]世楼の向に
富士ハ[illegible]や　其八余[illegible]の信投信別の市に嶽
[illegible]の嶽[illegible]南に指[illegible]
熟田[illegible]海[illegible]すくて當國の[illegible]
十[illegible]て七八を計ふ實に府下の第一[illegible]
[illegible]れかの聖像を[illegible]安置[illegible]

富士よむらゝめるを汚高津の麦よつ乃果し
りもふゝゝひとゝよてゝゝさひとゝやゝ志ゝるゝ己ゝ人つるゝ
俗語の連歌を好ひて和歌い事とゝせしゝゝ俳
諧ハ連ゝよ出連歌ハ中ゝゝ和ゝの流行ゝて
皆俗仲の風雅なれハ侍ゝをわゝれゝれ根を
ゆゝゝ栃の本の行を白眼ゝゝゝむやゝいゝ
一奏の俗語をつゝ好て法楽よ供へんゝゝ
連衆已よ定りてこゝゝ老ゝゝゝをひて小序の求
わり薄芳のわゝふゝゝを暫て辞せんとする
まゝゆめゝゝゝ寄よ世の謗よ年役ゝゝの若役
ゝりゝゝゝ白ゝを分ゝ働ゝわゝハ若役の侍ゝり
ゝて乗ゝゝゝなゝを書ハ多く老年の温役と

なわり八ゝや一世よ頭ゆめゝゝるわゝゆなゝ
ゝ女歳ハ世ゝ右よ出ゝる人なゝゝゝや誓盤を後て
ゝゝゝ乃ゝゝゝと韓ゝむハゝゝゝ病蓋のゝゝゝ
叶ゝゝ服語よゝゝゝ芳むをゝゝむハ邪ゝよハ
ゝれハ易ゝわめゝゝ鄙酒ハこつゝ年よ許て
ゝゝゝゝゝ口の序をゝなんぬ

合蟄撰ゝ年序

今年宝暦甲申の五月晦日ゝ非蕃合蟄身まりぬ
四方各追悼の句を紙ゝ惜ゝ歌ゝもむゝなゝゝ
年ゝ俳語亭よ風雅ゆゝ多い其志百ゝゝり
文會必世人をゝゝゝ序もまゝ新ゝゝ第序を

佐々木氏の句あれば支吾を定め作られ二首の
敲推を論せ〳〵人〳〵更に往時思へば老侯の
白鬚ばかりを眺撫詞を汎て曰
句中所謂蘘子者生前所嗜勸酒必爲下物且
石榴一株嘗與予今猶存庭畔
其齡なかばらん　世ならんなんそ図
面影ばかりなつかしい　嘗の月松よ乃こり残利
音信がまてい　夕の雨蓋よ斷故
恋ふ涙を添ふ乃つきわめ下来
思ひ寝を喚ふ夢ぬ　赤須
蘘子の石榴　酒むかし在
記念の石榴　霧ゆのつゆ濡

他なりやうて
恋しくあり
雁来やうて
夢もかな無

巴崔亦吟二十二首長歌行の奥書
我が祖父野双翁其世に季伶老人の門に学びて
吟老人及び湖春〳〵両伶三伶の二百韻を〳〵めて
家にあり〳〵ば延享八年野双翁十四歳
伶七十年の後昌を〳〵る其〳〵の〳〵むかし一〳〵
凡辞〳〵〳〵ゆ〳〵〳〵て我又此を遊ん
〳〵に當時尾城の両宗匠を〳〵ひして虞て
一巻の二吟伶〳〵む嘆呼又七十年の後に至ば

人のつくれる葉刀とやなのむさぶらひ八今の葉刀のひとり
わづらはしまりて紫式の斗かとは所くるもいさしらくら
らそさらん八子孫の古きを慕ふ是を風雅乃愛
遷ぶしわづらはせて書種の種を納めみくるる
なむ

宝延二年庚午はるの隠里那珂十九郷
の郡八月朔日西亭より業ゆく

燒蚊辭

世の人いとうとく蚊をいとのあるを以て業とし
夕の世にて枝を五月雨の雷のとかとやまと
すとの世に蚊帳といふあるを以て蚊を防きあるの民ともまた但
し一物の帝帳ともいさらべき程なりて世の費いとくるやや
されハ蛇の刺す蜂の毒尾も刺て人ハ害をしてせず既に俗の過
ち時是ともて防ぐとすれハ人の力劫と業をたしなめ針
ハ人の中にとりいとりハ後のたのもしかりけるなまく
蚊の景とつくれ人のまく極してもけをおもとしあるハ不
能れハ中ものをさみと常れる今宵一把の枝の線とたい
隠居とらちらせんとすれと遊興をしらふ傍さるみとる

けさすきうれたる紙燭さして汝を近ちいとゝ汝り業火を
はしる絶とうしの車あるへうすきうそも浅すき汝り身
と覚すれハ

火とゝりに焦ぬ板ハ人り焼れうり

送其常律

浮藻のたのあふつうれつ作ハ仕寄の書ものきのふまて
作れし身のまと笠紙のあるもせねうふハ送りの席よ
つうちりて孟と上て藻敬とうふ各俄刑ハ今年竹ハ板河
とゝせて是より寺すの便とのを
まりとゝ名ゝいかのそこ行

蟬引

伏の日さうの日さにたゝうゝて
蟬あつ〜ねきしやとおりふまて
とゝけうふい〜日数し強なく立うりて中秋風ゝまちの
ゝりりかゝすすうゝ和ゝひゝえして
死のふまこ〜うゝうは秋の蟬

賀其制義文

後父ゝ曰仰ハ和ゝ凝滞ゝ寄ゝ秋の風ゝたゝふと
さうゝ宮洛ゝあゝ中ハ身ゝ清うんゝそ世ふさうゝて人情
ゝし身ゝと安うんゝて世ゝへうゝひてゝゝ聴うゝ今や涙

世の琴をけいいて三ッのらこ住安き人あり

淪沦の水すあ〜八ヒ巾あるべし

星夕賦

今宵し星の逢夜ちて小姫ものを待わて帳
ふ〜ぜ〜ち守ろ〜〜きつれて沢洗へ梶の葉求め毎ゝ短冊
〜年ゝ京亀ちて此常匂ひ袖ゝ〜きをいそ清ら
紡てんあやめ〜ゝ〜ゝ定めゝ〜ゝ人ちのけ〜やきハ天
の芝ゝ〜雷のわ〜ゝ星のもゝ〜ゝ二階の再へ涙さ
次天上界のたゝひめ〜ゝ〜ゝ袖ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ
き秋の名のみゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ
ゝ〜ゝ〜ゝ居の袖ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

静かなるこゝろをいとゝ今又半掃庵とゝ家ぬしのめれ
掃日まりはけぬ日多くて床ハ苔をとゝ落葉を仕とゝ
なる庵のたゝゝたをふへゝり名をこゝろとして和二ッなり
才さんはいとゝ七条とゝ撰ふ

東嶺孤月　路傍古杜　蓬丘烟樹
海天帰厂　龍奥寺淫　市門暁鶏
隣舎春歌

東嶺孤月とゝ嶺とゝこゝの猿投山なる遠き山くの美ち
ゝよりとゝ天ちりて此山のあゝしゝ十月とゝうのとゝ時なるとゝ
七峰のとゝきとゝ花半ちる美うあぬとゝ昔八人の花しゝ
宝永の比の山の焼とゝ時美とゝ宝まゝしゝとゝ古き人のとゝ
けりとゝさんはさかけ山とゝ名のとゝとして安なとゝも淡へきを
文字とゝ猿投とゝ書とゝたゝめしゝとゝ尾方繁とゝたゝめしま
かしとゝたゝはしゝ月とゝ猿の名とゝ七とゝ方ほとゝきすも蜀
魂とゝ出ゝ月とゝ牽牛とゝ八むくつけきなとゝいや清氏の
女とゝ西とゝりきてゝたゝるゝのとゝいしゝゝ字とゝ丸とゝ分とゝ
月ハ和の長線とゝりて此山の南ゝとゝ和て清光とゝ八さとゝ
無とゝ此府下とゝ月の名とゝ名とゝとゝ此地とゝとゝゆゝ
とゝとゝ

路傍古杜とゝ世とゝ七とゝ仏とゝ人とゝ和とゝ八相生めきてとゝ
もあゝ又祇園とゝとゝりてとゝ桜とゝもあゝ涙ぬけ雨のゆふ樓る
雪の羽ちゝめとゝ時とゝ時とゝ夢雅の比鈴のとゝ空を正氏
てゝ一八此七とゝを以て幸姫のとゝる人也とゝ以人ありとゝ家八更
よみとゝ人へ

遠丘遠樹八州熟田の広はるより高の杜八行ちくて高の
霞炉の嵐山亭の南の観たるは京さくはるさくはるさくはるさ

まち市へ門へつゝみたれば曉のうゑ花まうゝて老のねぶのちゝ
らゝゝかれるゝ

陳倉の春毎もまゝもの農家の間ちれハふも及分
のゝゝ分のゝゝ分ゝゝ分ゝゝ分

讀菴名文

鞠しく奥の名たる大原にはよの名にしの虎ハ戦るう
名と大磯の岐女にしら程のうとろこふるわもを虎ちさこれを
鶏んやふ義庵しく家音ちしつき拾つる号ちるとはに
て義じ人ありて語りてを居ゆはくしい寸家の鉢と虎ち
ちしいてうちふるわ寸とし寸も寸なくうれしを見ち寸わ
けうしさゆつきすて名をを鞠 花

水音舎記

鈴木氏某ち居ちうし名つをて水音舎とふをふと他ちち
寺家ちえ一ち侍ち音の自画賛あるうの古池の蛙をうるち
わちしの泌義ちへかちれをちや雷霆の百里ち裏くしるれを
人の耳ちも殘ら寸ハ古池の水の音ち義の耳ち入てはいつも音ま
人の耳ちいきて西れ大悟の一句ちりとて侍へてはいふすや
ま次耳ち入はいふ又耳ち入はしいふ目ちの音をうれと
ま寸音今泉川の陰逆ちたちねて世ちつ人すちうりてづと
う夫ちしちう人ちかたちへハ今ちしつまれちまるたちたちの池ちち
ひたいちち蛙面のたちちをかせのちも皆他の池ちち池ちわちま寸さ
まちたち色ちとうんわいちち自画の一物ちあるへしたち家の風
雅をちりて言ちく雲井ち虹ちちちく八遠しけ風を色ま寸者ハ
ひ水ちち舎をしらさちへき

白公舎記

白ハ常ちちちうちへ障ち汚ハ他ハ白ちいちち寺ハきちちちちの内

まゐらせ居給へる仏像の御ものうちに法しゆ
風雅を好給へりし風雅とはふとこそもほうしされハ隠居
し昔院籍の家まもりてすく友とするぬ人を二ちの聖とつ
ねハつゝしませ給ふきゝ給ふ上て人又うれを白眼せさしんやまた白
ふ武名をとゝ寸今世事の官路をたゝしむ友と居給ハんこむ
と共に衆と交りて礼を忘れ寸心を悪とねくハうの家ものの
学きとゝて行ハゝ〳〵もうゝへ〳〵乃なんそれ雅をたのもし風雅
みんを乃をとゝ寸ん〳〵あるてん念味を究ってまた雲の志さまま寸
学てし閑居に保て白露のさゝ城ものゝ〳〵まうゝまた白金のうゝ
らいてまた白金の名聞ゝ〳〵

七不思議後序

和歌に西行あり連歌に宗祇あり俳諧に芭蕉翁ありてこれ
をハゝ〳〵し皆雲水に流浪をとゝ寸文人隠士を師くゝ
ものゝ〳〵に俳諧をゝ人の枕を鞋のさゝをゝ〳〵白雲の志を
をゝ寸ゝ寸ゝ寸今や行脚浮世もいまゝ見ゝ〳〵ふ俳諧師ハ世を
捐聚をゝ仏のゝく疱せゝゝ寸ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵家業ハ手のひ
らし寸仕官に脚をゝ寸ゝ〳〵て本来とゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
けゝゝのゝ〳〵ゝ寸布袋庵のゝ人ハ世を素封の名をゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
風雅を寸ゝ〳〵ハ身健を幸仕ゝて何を世伏をゝ寸ゝ〳〵きやゝ幸くゝ
西の指をゝ寸ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵の七不思議ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
此人ゝゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
代を俳諧の行ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
つゝ寸ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

[illegible]光[illegible]に固志の徒ありて鷄黍の約を[illegible]れ[illegible]も学復と
倒るべき鉢の木とも蚊[illegible]なるべきてもあやうしてなりまもり
更おろ[illegible]幸紀行とんてもあれぬ[illegible]人紀りの杉と示
たに求よ三三家の白を[illegible]たる[illegible]ハ手[illegible]ま[illegible]書[illegible]へ[illegible]の没[illegible]
[illegible]れ[illegible]深へき[illegible]の家[illegible]やはし[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
主人の遠遊[illegible]の[illegible]ふ[illegible]の[illegible]行[illegible]の[illegible]森の[illegible]方やを[illegible]
[illegible]白[illegible]書て[illegible]

拾[illegible]扇[illegible]の別[illegible]より

贈暁吾辞

暁吾[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]の悲歓丁と五十年盧生[illegible]夢の[illegible]定
[illegible]て[illegible]て老[illegible]致仕と[illegible]ふ[illegible]勤[illegible]む[illegible]
[illegible]職[illegible]て[illegible]や衣食住の[illegible]

[illegible]き[illegible]吾[illegible]ぬ[illegible]穴の[illegible]を[illegible]ら[illegible]
[illegible]る

梅[illegible]世と印の花[illegible]跡の事

菴記　為暁吾需

緒巒[illegible]る黄島の丘隅[illegible]る[illegible]止[illegible]ハ[illegible]梅なり世[illegible]雪[illegible]と遊
小僧信の一石[illegible]仏[illegible]する[illegible]伝の宮[illegible]ハ[illegible]
[illegible]年老[illegible]弱[illegible]止る梅[illegible]て[illegible]ハ[illegible]べき恒の梅[illegible]
恒の[illegible]梅[illegible]ハ[illegible]の[illegible]菴[illegible]
[illegible]ハ[illegible]の祭と[illegible]化と惟[illegible]の三万二千[illegible]
安置[illegible]仏[illegible]行[illegible]第[illegible]茶[illegible]火[illegible]
く沢[illegible]

勝を容るゝに安しれども夏の防ぎ冬の設いくゝの事ゝ費多き是乃姑く文斧の為もて人ハ安きの天地に居へ世人ハうしなを狭しとふもあるゝハ住ひろしとそふ考ふる

牧屋つゝりてたゝむあまりあり草の庵

蝸牛荷頌

猶ほ蝸牛おハ風の吹くしあり有の蓮風の車二つ乗しいとゝ安きこゝろ有るゝハうしなをふものゝ

巣てしなく死もあるゝ蝸牛

黄岡亭記

世の求る所衣食住の三つあるて一日もなくてゝ叶ふ事なれをもて居るゝめとして掃なるものハ只樓なるの江南の橋のたゝハしあるゝさんや永き夕ハ亭を西南よりひらきまゝ月もたのまゝ高の水を残さしるゝ伊吹の嶽ハ眺まゝ南宮の山つゝなつ春花の遊ハ眺よ入る眼下ハ広ハ四方きわなく樹高きゆゝしへゝしなを春ハ雪花の実る時秋ハ作の月まるゝ菴おふ夜ハ柳まゝりて班女ゝ扇へゝしなをもゝ納ハ炉なるもして清女ゝ簾へ挑て四時の農業目とゝなるゝまゝ山の街道もゝゝまゝなを通ふ市人の戸ふゝとひゝ声おのゝ休まゝ炉ハしなハ世ゝゝゝ世ゝゝゝ人もまゝに人家目ゝいそゝうゝ也ゝ木ゝ岐垣川ゝなれてゝゝゝる舟の榜

の書も家よの抜よひくくとさしに所人の影さる西詩客の作
に入る忘こるとりてあまの者は此人ありてはこの名を表
且記とすもし詩はる事然くかしはこと又度くらりもの
しく我行きる事あわは居のかよめりて竹の林にれり大
なる猫稼のこしと是とはこ家ぬこきとりてあるし
の我の友なんもの此小是をかそ人字り幸ホ美岡
事と敢たる気閑てめるみオ心よ恭して事る字決り
は言の うホへくハ取ては幸の紀とまくしり山言のあと
らもんはり碧瓶る蓋して方むや絵へ主伝てれ
と頻は事なれ

名茶枕詩

栗枕と名を分ていきせとふ人ありもふ人をもはさるもと
事ふとふたはは世りるくおそて書の伝る大きるや
雪もるくる乗ハ宝
茶ちくもし牛やもるり仕さ

花島山賦

ホハこの事の事ふはるるもあり事ハ花を山の花人
くくはるる見数もや弥生のせるあまの見ハ名
強かくもりて深のはる色の盛のを色とも物のきと茂
情は遊人ハ家のこもしわ寺夜ハ所のこかしこもも
ていは多るに沼るは中くもるきかこ事ハ

なれる

ちり殘る茶色ハまさわり花のゝ
山下子屋のまなしわさるあたくらしくと寒さ
まる四邊村落の煙えなくもきせるゆくもと
暫時あり

雲花より四方くさく山の上

贈所訪不遇人文

安達ゝ京の國なりすもしも志のゝ蓮生の法あと
留ものすれるよ弥八されるわきとたれ菴りわ
ゝ男の思いけなくて顔八月はりなりてゆくき
まいめんちまも思ひもまをうりうるもわゝ一ろ
いくまゝ稚の出るよりてなりもすくきとゝ人
さいひくんハうのゝ初水といふ徒樂和ゝのゝ少ゆやん
秋もやくれぬ時雨の中ゝ八ハ月ゝよりて夜毋ハ月ゝ雪も
わくさんやくねて夜ゝちの伊ゝをへくもゝ茶徹
ゝのくきせる求めて見ゝわひそゝよ人待ハハなひ行り
行菊にゝおて白を殘しゝる楚ゆゝくいひつゝハす

大蓼のくゝやくゝめ雪ゝの門

芭蕉よりせて白を殘しゝ芦丈ゝ行る

いくまくい一立枝もゝんぬ抽りくさ

三井補亭記　延永四氏事

同ゝ行るゝおゝて出ゝに行ゝハ古人の言なりゝ

されば世の人の俗なる所を或は山林まむしいて俗を忘むを
いてこゝ居を淹まゝるも富士の上に於ていらるゝ所を
めいてゝや印を解き冠をうけゝやゝ世を逃れの
心も誘へし孟母のわゝ俗を離れ永田氏
の居宅は俗情を忘れて金鏞を輝き朝日夕日
の緑をわかちて人見くとわゝ分を繡の袂を掲く
をすゝと俗を忘へなり官路を立まゝの志わる眼を
書にうゝこゝ市廛を作ゝ世塵の言を忘れて
ゝ俗回の悲情に接むゝゝこゝうて功なり
名ゝゝ後ゝ子孫を長ゝ伝濯りてこの山林に伝る
ゝゝゝゝ孫生を安く書ゝあ今はいを伝ゝ
ゝゝ志ゝむ主人に記を求てゝゝ多にゝ

書書沙ゝゝ人俗俗なりと弟ゝむゝゝ伝ゝ
ゝゝも家ゝゝは才を安ゝれはなり

訪以文詩

以文子君にゝゝひゝゝまゝりて水ゝ路の夏ゝ
うけ橋康ゝの詠をつゝて帰国の折ゝもつてわゝゝ
家居をゝゝゝさし新宅を馬ゝゝむゝてもつゝてゝめ
うやの白いを行旅庵のいやせむ今ゝに夏ゝむゝゝ
ゝすをを叶いてわゝゝの風流いうにゝゝゝ伝ゝあんと
ゝりへはゝゝくゝねはいよゝなつゝ

生駒まゝ旅の舎やれゝゝます

嘯苍誌

絃を断剣をとけむ　の涙袖よりこぼれて

一つの好ふ歌られぬるに梅軒の嘯苍子いまさせよ

こゝを一朝に中秋の月をも待て故の露宿

ぬ　つゝこそを目よりぬ風の音よゆ　ふ

よりつひよりてひく　よりの調をうゝ　遊さく

ていんらなり誰をまゝんしけ紀子武門乃

藝能絶より勝れ百事百成の業用の儒舊門の徒を

慕いるに世ハ一日にあらの行跡を試て又ハ夏中

百姓の日夜をつねに明雲風雲露に魂を

なやまし一ふしの道の大悟せむ者ハ常の諸ありしを

うゝ我ふいうるすくせりゝむ劇金の更久

月の夜はる雪の朝會其人かれて我をうゝを我

うけて苍子たのまゝそにるを一雪の口くやよ苍子ゑ

天象時氏のゝさをぬを我ハ人事の上うて者ゝ

ゝゝをゝゝあれゝゝ面ゝゝゝ白拍方れハ

是ハ我なゝゝそこの白をいいゝりそれハ我ゝ白をこの

いゝまゝりなゝにるゝい興ゝゝもはるゝ一夜の業ふ

なりゝよ思ひにうれゝ二年ハそこの別墅よいさあゝれて

乘をゝゝねゝ清流をすゝあゝハ其山ゝこゝ乃寺すゝ

ゝての行樂校をあの合吸筒を井ひて露もたゝ

なゝわゝゝよひの春君の清恩にゝりて我ハれもゝぬ

宮ようゝりいゝゝるゝまゝれて風雅の會もひ四

わゝゝ卯月ハ清の衣よめゝゝて百里の東よ別ゝ

名殘くるよりやハ止むと海軒より出日の雨をぬるゝぬ
この山にゝ紅わり雪の郭公と秋をそゝ立てゝ四月なりむ
菅笠の蔭といひつゝ行くゝ卯月まゝ一ゝ雨ゝ花をそゝて行
八ゝ年年と取わゝぬ辞よゝうひの垂ゝを行ゝる中ゝも
世のわゝるゝみゝひもわれハとこうわゝ新ゝちゝまゝ
つゝもゝれハ秋月の上をゝと思ひつれ苍子ハゝゝゝれゝ
すゝゝゝれハうゝゝ秋周ゝむゝハゝひゝうゝゝわゝゝ
こゝゝを定めなゝゝゝ始めて思ひ合ゝれめゝゝれハ什物
かゝゝわ中ゝゝまゝてゝ見んゝゝも秋にハゝわりと人もゝゝひ
ゝゝゝゝ若霊祝ゝゝゝゝゝゝわゝハ梁月の夏ゝゝゝて
けゝゝ向の敲推を定めゝ偶伴ゝれ富士の雪ハ時ゝて
消ゝゝゝけ帰絆ゝゝゝてゝゝゝ朝ゝゝゝゝゝ

供花
拝礼　社（カミ）　脇（シモ）　ゝ位袖もなゝゝ夜ゝゝ

苍風誌

ゝゝゝの秋ハゝ武蔵のゝわゝて晴苍子ゝ訃ゝゝ鋏をゝゝ
八ゝ年もおゝゝ吾妻ゝ下りて行ゝゝひなゝ秋垂月ゝ
草風子ゝけゝゝき便をきゝゝハいゝなゝゝゝゝ其ゝ拔ゝ
八ゝゝハ金ゝゝゝ駿ゝゝゝゝ保ゝゝ居ゝゝゝ空ゝのゝゝゝ
泳めゝゝを行ゝゝゝゝ苔ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
そゝゝゝと袖ハめゝゝゝめゝゝゝ秋の汐ゝゝいつゝゝ
なゝゝゝゝいまゝ殆立ゝゝゝも定ゝゝゝゝゝゝゝを
ゝゝゝゝゝゝゝ其ゝゝゝハゝのゝゝゝゝなゝて露ゝゝ

萩の枝のかしらもうるほしけていてよこのごろ
ゆゑも死めくるしくれハ辞世のうたなど思ひ出せるを
こうるてもむさ骨折となりぬくるるこころ
さこんしをあるゆしかりのなかめはいそさる
ちろあんハりまちかつきうふくふんられれ
なるるるしてもて一夜の伽をしたんなさし
むらひるる彼の人更よ目の前をさるを行もの
うんしるる氣色なれハ又こそといひて立つるそれ
ちむる長ちる別れしハなるわるる秋補老子う誘か
きるれるるるる袖をぬしてさるるても世よ不ち儀
なる人の絶るる有まきなるひの行よゆるうなる
まてをしるわいるるを問なる又其人を行れ

むるるるるるる昭せん起て思ひ外てうれる空!
隣笛ま湯と断て一句まるめるのるれ
誠るまる思るれを初去れ

悼崔世文

人年の秋まわるるる誰れま誓ひ命なりるむ水垂
月の晦日ま孫井氏崔世身まりぬこう短夜の短るる
殆なるるいまる年も世四るり月花の言も身ま
しむつきるるもわるぬを深く風雅ま心を入て其
才の勝れるるるこう只明雪のふるまひもまめるま人ま
あてるやられて只け人をこんるるくと若き子おるり
るる新るハ吳こんの度の下ちまハ川出されつるあれ

世をわたるハ蕉門より一族の大わたりに秀つへき
器をうる夏野の露とうたなせ〳〵昭々ふ市後せめ人の
袖も濯ぐ旧の川流よりわたりくるくるハ全なるたち戸
ふるいして開ふわよ一句をもゆ待
こぬかれわをうるみ月も所ふるり

悼八亀辞

時を庵のめ〳〵月よりぬ訓むろ〳〵年月を思へハ老貧
さ〳〵よ林ゆ〳〵〳〵我庵乃巽よわ〳〵りて其わ〳〵野も
遠〳〵ねハタアの雪うと立のかるはるゆに空を詠ゆわ〳〵
故やりよも泣てうる野の縄りゆ

悼五條坊文

六、菴よ別れ反ゆ合世をさ〳〵り〳〵甚折〳〵の傷ハさ〳〵ゆ
行ハ立条坊の徒たる忍山ひなる其世のて〳〵もをも
こ〳〵よいい出て玄と庵むつゆ〳〵るり〳〵を名に縁わ
蓁のゆうなる秋をゆよ待て世水毎月の雪〳〵信〳〵
惜む〳〵恋〳〵雪行卒よ齢を清〳〵て祇市より〳〵りもの
いうたて秋ゆふ〳〵て誰わ〳〵もよりむ〳〵を清ゆん
たゆ友よ位〳〵や〳〵の羽めけゆ

信信別れ李射山

姑山〳〵ふハさゆよ宗匠某よ〳〵〳〵〳〵名ゆりゆを云ゆよ
ゆ〳〵るくの考合て出て改名の字を三にゆ〳〵むさゆれハ

はゝ名を思ふよめてゝき姑射山の字を摘てこゝいひ
なゝもゝきゝゝゝ上の一字を置くて射山とやいをも下乃
一字をわゝゝめて姑射とやいをもいつれもの意を
失ゝゝ二つは一つを定めむはめの撰よわゝくゝ筆の
序ようゝふ

ゆゑ山ゝ名をまくて呼ふ鳥

与某文

好て豪飲ゝ恥ゝ人わりいたに思ひゝゝ有ゝん鳥
八仙の仲間を遁れて今ゝりはいゝ酔ゝゝ固く拒
ゝゝゝ行行末の乱我なゝゝゝゝゝゝゝゝ右は今ゝ
へき語を書て得ゝせゝゝ語ふはゝゝゝゝ下戸なゝゝ

酔て面白きやん止てゝゝゝやん其ゝ開ふゝゝゝゝ
其責のいとゝ切なゝれはいゝるひゝゝてすゝゝなる一句を
筆を

神もゝけゝ酒ゝゝとせ〜徳稜

一名画賛

はゝ画ゝ誰をゝつせゝゝん志ひて名をつけてゝ置ゝ
容貌ゝゝゝふゝゝはゝ陶氏ゝ髣髴ゝゝゝれゝゝ例の
菊なゝれはいゝゝ鳴呼我ゝをゝゝれゝ東籬すてゝ雲
白ゝゝて立徒の柳ゝ岩ゝゝゝゝなゝ昼ゝを更ゝ
冬ゝ閑明ゝはいふなゝゝゝ
菊ゝゝゝゝもふゝゝゝゝゝゝゝゝゝ霜の羽

定茶名文

茶碗わるくして製して名をいう、定めむと称するなり

しりわくを雑の一句を著もて但聚て

茶の下をわふく片もハ松ゝ

されをゝまくゝもいをゝや

酔雀亭記

ゝよ呉竹の世ゝ酒世わりさゝハ臨印ようけ

むひのわひしゝふ店ハ似ゝてもわゝ夫又古松葉

常聲の文作ゝ雀のこゝる紅葉をゝつゝ

士蔵の白堊雪を奪ふ其わゝ又風雅ハさゝ冨ハ

強人ゝよこゝよゝるハ深情詩を行ゝよまわりと

いひしハつゝ行ゝの見来なゝも毎日杖ハ百錢をうけて

酒金買のをのゝを二季の情をも強りせすたのりさ

得言なゝめされハ夜篇ハ名よりの傳聚屋の机を

付ふれゝ程一宝ハ扁ゝくゝ号わゝむゝを号ハ求む

卒ハ酔雀の二字を扁ふ其をいゝたと問ようの乃

鄙鄙の雲を脱金亀を解て價ハわゝたゝ

わゝを仙雀を日ゝ百杯ハ酔ゝめてゝりうれゝ

持合せの千年の齢を酒ゝよこゝゝ合点やと

且称れ且祝ゝてわゝゝ為ハ謾可名を採る

板千居記

居所ハ号を定ゝて後ハ人わり其人ゝりゝ名を枫ゝと

ふ机を紅葉して夜の錦ようなる黄なれ錦を
きて夜行らこゝ人富貴まして人よりもたれかとゝも
辞ゝさられゝ其家を作よ長ませ辞ゝ心のある人ハ
ゝて白雪よ面をさゝけて是ゝるゝのゝまひまくれ
ゝ身よ徳あり家富まゝいゝにくゝろくゝんゝも世の
物のつゝくれなゝくしさてこゝて錦ゝて細をくゝまま
ゝのゝこきをゝつもゝるゝ物と秋ハ只其夜の錦こゝ家
しくれ物必なゝぬ長久の清なるをやゝれハ秋の
机の沼ゝるゝ世てを移ゝて千秋の二字よ定めゝて
すゝ其唱古くゝてめつゝゝゝて世字を上下ゝ
うゝゝもゝかなゝくゝて唱ゝ所ゝ秋ゝゝ絵ゝ
秋千君の三字を影ゝけゝの求ようゝゝゝゝり

俳諧五七集

金五冊

枇杷園先生八一世の雅英すぐれて雄名海内よりろ名を
生涯の俳諧数しらぬ多き中より特更に風流新奇ふ新
数篇をえらび三十五部をつらねてあづけて五七集とよ毛して
先生生涯の俳諧ハ尽るにたらざる事あゝ善ゝ英ゝ
世流ものゝその流をくむくハ勿論他門の人も見ぬ人ゝ
玉をつらま金をちりめゝ詞花言葉中ゝその餘の群英の
句までひろく識ぬき重宝とハ書なり

尾陽書肆　東壁堂欽白